

逆カルチャーショックの試行的研究

—— 米国からの帰国女性 ——

長谷川 典子

1. はじめに

いわゆる「国際化」の波が押し寄せ、海外旅行のみならず、長期間に亘って海外に出ていく日本人の数も増加の一途を辿っている。同時に海外生活を終え帰国する者の数も年々増加している。同伴家族の一員として日本を後にし、数年後に帰国するいわゆる「帰国子女」が社会問題化し、研究対象として取り上げられるようになって久しく、帰国生徒・児童が帰国後体験する逆カルチャーショックの問題に対しても、数多くの研究がなされている(小野田, 1988, 田村, 今村, 1987, 巖, 1987, 箕浦, 1984)。実際、佐藤(1996)によると帰国生問題に関しては1991年までに499篇の研究論文, 178篇の単行本, 225篇の雑誌文献が出版されているという。

一方、「子女」ではない「帰国成人」については現在のところ、さしたる関心が払われているとは思えない。実際、1年あるいはそれ以上の長期に亘り海外に滞在した成人の帰国後の適応や海外体験がその後の人生にいかなる影響を及ぼしているか等についての研究は筆者の知る範囲では稀少であり、日米の留学生を対象とした逆カルチャーショックに対する比較研究(Uehara, 1986)の他は、海外青年協力隊員(久米, 1990)、帰国主婦(倉地, 1991)等一部の帰国者に関心が払われている程度である。しかし実際には、人格形成期の子供ほどではないにしろ、一定期間異文化圏で生活し、その空気に慣れ親しんだ

成人は多くの場合において日本社会に戻った際に何らかの形で精神的な葛藤やストレスを経験する。そして、異文化での体験が個人のその後の人生観や価値観に様々な形で影響を与えている。

当小論では、上述のように従来研究対象としては比較的軽視されてきた成人の帰国者のうち、アメリカ合衆国(以下アメリカと記述する)からの女性帰国者、なかでも現地で高等教育を受けた者を取り上げ、彼女達の帰国後の日本社会、組織への適応問題にまつわる諸側面と、滞米経験が与えた影響についての考察を行う。具体的には、帰国後彼女達がどのような面でショックを受け、また職場や社会でどのような問題に遭遇しているか、そして滞米経験を通して、価値観、態度、コミュニケーション・スタイル等にどのような変化があり、それらの変化について現在どのように評価しているか、等成人女性の帰国にまつわる心理的な諸側面を明らかにすることを目的としている。

対象を米国に滞在した人々に限定した理由としては、まず滞在国の文化によって帰国した際に生じる問題点の性質がかなり異なることが予想され、ある程度地域を限定する必要があること、そして、長期滞在または留学を目的とした渡航者が最も多く、また帰国者のリストが入手可能であったのは米国からの帰国者であったことが挙げられる。

次に、今回女性のみを対象を絞った理由としては、これまで一般に帰国の際の逆カルチャー

ショックや適応の問題を扱った研究は男女の区別をしていなかったり、比較される場合でも男性は高学歴の留学生を対象としながら、多くの女性はその同伴家族で語学力も低いものが研究対象として選ばれているなど、女性が従来比較的軽視されてきたことが第一の理由である。また、成人帰国者のうち、日本では男性よりも女性の方がカルチャーショックが大きいことが指摘されていることも理由の一つとして挙げられる。これは上原(1986)や、Gama & Pedersen(1977)も示唆しているように比較的自由な社会から固定的な性別役割が残る社会に戻った際に、女性は男性よりも大きな差異に遭遇するのではないかという仮説に基づいたものである。

2. 研究方法

帰国女性の適応にまつわる諸問題を解き明かし、その後の人生への影響について調査するという当研究の目的から鑑み、最も多くのサンプルを短期間で入手することが可能な郵送によるアンケート調査の形をとった。対象者の選定にあたっては、オハイオ州立大学、デューク大学、ミズーリ大学等計10の大学の同窓会、日本人会等のリスト、及びイーストウエストセンター、フルブライトの奨学生リストのなかから、計519名にアンケートを送付した。その結果、27通が住所不明で返送され、回答は計113名からあり、回答率は21.8%であった。(但し、うち1名は米国滞在你の方が長く、日本の学校に通った経験がないということで今回の分析対象からは除外したため、有効回答率は21.6%。)調査期間は1992年3月から4月の1ヶ月間であった。アメリカ人研究者との共同研究という形で行ったため、アンケートの質問は全て英語で行い、回答者には日英両語のうちどちらで回答しても可能とした。アンケートの構成は以下の通りである。

1) 仕事、結婚、日本的な行動等について述べられた計40にのぼる文章に対して、賛成から反対までの5段階のスケールのうちの1つを選ぶもの。

2) 「海外での生活を体験した結果、他の日本人とは異なっていると感じている。」等の9つの文章について肯定、否定のいずれかを選択し、その理由やコメントを自由に付け加えるもの。

3) 「私が職場で遭遇する最大の問題は」等で始まる計10の文章を完成させるもの。

4) 回答者の背景に関する質問。

当小論では、上記の質問項目のうち、主に2)と3)の記述部分の回答の分析を中心に紹介する。

3. アンケート回答者

回答者の米国での平均滞在年数は4.7年であったが、S. D. 3.9と滞在年数にばらつきが見られた。留学年数は、平均では3.2年でS. D. 2.8であった。帰国後の年数は平均では15.9年(S. D. 2.8)と帰国後かなり経過している者が多かった。回答者の年齢は、20代が10.0%、30代30.0%、40代12.7%、50代28.2%、60才以上19.1%となっており、30代と50代が若干多いものの、多様な年齢構成になっている。

現在の職業は大学教員が61.5%、小・中・高等学校教員3.7%でありその他金融、製造、販売、マスコミ、公務員、コンサルタント、研究員などが32.1%で主婦と回答した者は2.7%であった。また、何らかの職業に従事していると回答した101名のうち、80.2%がフルタイムで働いていると回答していた。このことから、回答者の多くは有職者であり、多くが教員、研究者など留学経験を生かした職業に就いていることがわかる。

4. アンケート結果

以下では、アンケートの結果を1) 逆カルチャーショック、2) 日本・日本人観、3) 海外生活体験に対する評価の3項目に絞って紹介する。なお、自由記述の回答に関しては内容分析の手法に則り、分析を行った。分析は筆者と大学院生3名の計4名が行った。手順としてはまず、筆者が記述内容を読み、その内容のテーマに沿ってカテゴリーを作成した。次にそのカテゴリーをもとに各項目に対して筆者と他の分析者1名の計2名が分類を行った。分析者間の信頼度計数は79.2%であった。

1) 逆カルチャーショック

「日本に帰国して逆カルチャーショックを感じた」という項目に対しては77.8%と回答者の約8割が「はい」と肯定していた。以下にコメントの内容分析の結果を記す。

表1 逆カルチャーショック

		(実数)
女性の地位、女性への規制	17.1%	13
日本のコミュニケーション・スタイルの規範	13.2%	10
生活環境の違い	11.8%	9
職場に関すること	9.2%	7
人が何を考えているかわからない	9.2%	7
グループ志向	7.9%	6
人間関係	6.6%	5
家族に関すること	5.3%	4
日本人のマナー、非言語コミュニケーション	5.3%	4
生活の質	5.3%	4
人が自分の話を聞いてくれない	2.6%	2
自分の役割、地位の変化	1.3%	1
その他の理由	19.7%	15
否定	9.2%	7
理由なし(肯定)	7.9%	6
帰国後のカルチャーショック	6.6%	5
カルチャーショックを克服した方法	3.9%	3
計	142.1%	
(コメント記入者76名中の%)		

最も多かったコメント内容は、女性の地位、

女性への規制や差別についてであった。その中には「在米中は女性、日本人という目で見られるよりむしろ一人間、一個人として見られ、私自身もそのように行動していたと思う。日本では、敬語、及び女性語の存在より、やはり女性という部分を意識して行動しなければならない印象を受けた。」のように、自ら使用する言葉との結びつきからの指摘や、「They told me, “You, girls should be...”」や「I never realized Japanese men (younger and well educated men, too) are so sexist. And I felt shocked by the fact that they felt free to express their sexist opinions.」のように男性の言動からショックを受けたという記述があった。また、「女性自身の男性に対する女性らしさの強調」や、「Japanese women often act foolishly cute.」のように女性の行動からショックを受けたという意見もあった。

日本のコミュニケーション・スタイルの規範については10名から意見があった。この中には「アメリカに行ったときはカルチャーショックは無かったが、帰国後のカルチャーショックの方が大きかった。今でも時々戸惑うことがある。特に自分の意見を言うことはほとんど差し控えなくてはならないように思う。」や「イエス、ノーをはっきり言うてはいけなくていらいらすることがある。」のように意見を差し控えることに対する戸惑いや、「人の話を聞き終わるやいなやまたは聞き終わらずすぐ反論すると言われた。」や「When I tried to get a part-time job, I pointed out the achievement of my graduate study and expected to negotiate over the conditions, e.g., pay. But such attitude was not positively accepted.」のようにアメリカ的なコミュニケーション・スタイルが日本で受け入れられなかったことについての記述が見られた。

9名が挙げた生活環境の違いでは、「何も

かもが小さくて狭くてとても窮屈に感じました。」というコメントのように比較的軽いショックから「For about 2 or 3 months, I was literally terrified to go out because of the narrow streets packed with cars and the narrow and somewhat steep-looking stairs at the stations, where people were rushing and pushing without any words. Even today I sometimes feel that I need more open spaces so badly.」の意見に見られるように外出に恐怖を感じるほどのショックを感じたと記した者まであった。

7名が「あまり、自分を表現しない人と話をしているといらいらしたりすることがある。」や「日本人は表情を表さない。」「I found people were less frank in Japan.」のように感情を出さない、意見を率直に言わない等の理由から人が何を考えているかわからないと述べていた。

また、「Seemingly overly hierarchical, formal, rule bound, strict, bureaucratic...」のように組織や職場の環境について述べた意見や、「I had such a hardship to get along with senior people in my university. It took about two years to overcome this.」のように職場の人間関係で苦労したという意見など、職場についての言及が7名からあった。

グループ志向については、6名から指摘があり、例えば「時間の使い方が日本の方がグループ志向で時々それについてゆけない。」といったものや「Everyone in the department did everything together...」のように皆が一緒に行動することに対する戸惑いについての記述があった。

5名以下の指摘では、「日本に帰ってくるとじめじめした境目のない対人関係がわずらわしくなっています。」のように日本の人間関係についての指摘や、「Men spit phlegm out on the street. People push. People suck their teeth when they think. People come

physically very close to you in terms of distance. Personal territory is very small.」のように日常のマナーや対人距離等の非言語コミュニケーションについての指摘、「My parents still want to control me.」や「It seemed to me that my parents expected me to feel very happy back at home, and therefore felt betrayed when they found I was missing my life in the U. S. very much. We had a long uncomfortable time...」のように家族との葛藤を挙げたものがあった。

2) 日本人観

日本人観については「おかしいと思う日本人の価値観と態度がある」についてのコメントの紹介と「日本人について最も嫌いなこと」及び「日本人について最も好きなこと」に対する回答の紹介を行う。

まず、「おかしいと思う日本人の価値観と態度がある」という文章に対しては「はい」と答えた者が92.3%、「いいえ」と答えた者が7.7%と9割以上のものが肯定的に回答していた。以下に記入されていたコメントを内容分析したものの内訳を記す。

表2 おかしいと思う日本人の価値観と態度

		(実数)
女性の立場	20.3%	14
贈り物, お中元等のつきあい	15.9%	11
グループ志向	14.5%	10
仕事に関する事柄	14.5%	10
本音を言わない	13.0%	9
形式主義, 前例主義	8.7%	6
世間体を気にする	7.2%	5
古い家制度, 家族観	7.2%	5
女性の態度	5.8%	4
義理	2.9%	2
その他	17.4%	12
そうは思わない	10.1%	7
計	137.5%	

(コメント記入者69名の%)

最も多く寄せられていたのが、「Many men expect or force women (girls) to be

passive, obedient, or inferior to men.」や「Men in the office think women should work like a house keeper even in the office (cleaning, making tea, ordering lunch, etc.)」のように女性の立場の低さについて指摘した意見であった。

次に続いて多かったのが「お礼の気持ちを品物で返す, 中元, お歳暮などの贈り物等」に代表される贈り物文化についてや「Over-emphasizing a sense of harmony in a group. Japanese tend to consider disagreement or conflict of any kind as selfish and immature behavior.」の意見に代表されるように人と違っはいけないと考え, 同じであることをよしとする考えに対する反感等であった。

また, 仕事に関しては「つきあい残業」「年功序列」などが問題点として挙げられていた。その他, 本音を言わないことについても「・・・どこにでもあると思うが, あまり極端だと理解しづらしばかばかしくなってくる。なぜもっと自分を出さないのという気持ちになることがある。あいまいさ・・・あまりに婉曲的で何を言いたいのかよく分からないことがある。」や「素直にありのままに自分の考えを言うことを遠慮する方が好ましいと思われる。」など様々な意見が寄せられていた。

6人以下の指摘では「Some good proposals are rejected by saying “no previous case.”」「Japanese always try to follow the rules even though they do not think they're right.」のように前例や規則に縛られる事に対するものや「他人がどう思うか気にしすぎる。」や「結婚を家と家の結びつきとすること。」「親の言うことは何でも聞く。」などのように家制度や家族観に対するもの, そして「若い女性のぶりっ子的態度。年輩の女性が口を押さえて話すこと。」「女性の仕事観, 結婚観」など女性の行動, 態度や考え方等に対する意見もあった。

その他少数派の意見では, 「feel free to ask very personal questions to others.」のように個人的な質問を平気で尋ねるといった指摘や, 「公共の物に対する無関心」「会話(大人同士の)を楽しむ習慣が無いこと。」などがあつた。

次に「日本人について最も嫌いなこと」として挙げられていた回答の内容分析の結果を紹介する(表3参照)。

表3 日本人について最も嫌いなこと

		(実数)
グループ志向	34.3%	34
直接的でない, あいまい	24.2%	24
形式的, 権威主義	7.1%	7
無礼さ, パブリックの概念の欠如	7.1%	7
プライバシーの欠如	7.1%	7
原理原則の欠如	4.0%	4
男性中心の社会	2.0%	2
その他	24.2%	24
計	110.0%	

(コメント記入者99中の%)

最も多く指摘されていたのは, 「Uniformity in ideas, customs. Idea that “I'll do if the rest of the people are doing.” や「グループの一員であることに比重が置かれ, 個人の能力や個人の意志が無視されることです。」の意見に代表されるようなグループ志向であった。次に多かったのは感情を出さない, 本音と建て前がある, 曖昧などコミュニケーションの問題であり, これは約4分の1の回答者が挙げていた。以下, 形式主義や権威主義, 無礼さ, プライバシーや原理原則の欠如, 男性中心の社会等が問題点として挙げられていた。その他の意見の中には「必要以上に自分を卑下する態度。」や「西欧志向」「ユーモアに欠ける」「not to use time efficiently」等があつた。

以下では「日本人について最も好きなこと」として挙げられていた回答の内容分析の結果を見てみたい(表4参照)。

表4 日本人について最も好きなこと

	(実数)
察し, 思いやり	29.0% 29
丁寧さ	19.0% 19
親切さ	12.0% 12
勤勉さ	12.0% 12
慎み深さ	11.0% 11
感受性	6.0% 6
文化, 芸術	5.0% 5
和の精神	3.0% 3
許すことを美徳とする	2.0% 2
その他	30.0% 30
計	129.0% (コメント記入者100名中の%)

上記のように、察し、思いやり、丁寧さ、親切さ、勤勉さ、慎み深さ、感受性等が重複して挙げられていた。また、重複しないその他の中に分類されたものの中には、「長期にものを考えられる。」「宗教的寛容さ」「loyalty」「They don't fire people.」等が含まれている。

3) 海外生活に対する評価

以下では、回答者達が滞米経験を通してどのような点で変化したと考えているか、2つの質問項目に対する回答を見ることで明らかにする。まず、「海外生活を体験した結果、他の日本人とは違っていると感じる」という文章に対するコメントの紹介をし、次に「海外生活を通して私が変わった点は」という文に続けられた回答を見てみたい。

回答者達は「海外生活を体験した結果、他の日本人とは違っていると感じる」という文章に対しては回答者の4分の3の79名が「はい」と肯定で答えており、「いいえ」と否定したものが28名で全体の約4分の1、「どちらともいえない」と答えたものが1名あった。以下に自由記述によるコメントの内容分析の結果を記す。

表5 海外生活を体験した結果、他の日本人とは違っていると感じる

	(実数)
国際的視野	28.6% 16
積極性	14.3% 8
自信をもつ	3.6% 2
その他(異なることを肯定)	41.1% 23
その他(異なることを否定)	19.6% 11
計	107.2% (コメント記入者56名中の%)

最も多かった回答は、「In a sense, I am bicultural. I see what is ordinary to Japanese, with amazement of an outsider.」「I'm more skeptical about Japanese customs.」「I am more aware of international affairs and about many races (racial/cultural conflicts), etc.」等の意見にみられるように、日本文化や日本人を客観的に見、世界のことに関心を持つようになるなど、国際的視野を身につけたというものであった。

複数寄せられた意見としては、「自分の意見を持っているということと、それを言わずにはおれない。」「I feel I am more assertive than other Japanese.」のように自分の意見をはっきり持ち、表明する積極性を身につけたということであった。また、「I'm confident of myself.」のように自信を持つようになったと述べたものも2名あった。

その他として分類された意見では、「I can use time more efficiently, and think clearly and logically.」「I am not obliged to behave like a 'Japanese woman.」等があった。11名が自分では異なっていると感じないことについて意見を述べていたが、その中には「I don't feel different, but other people say that 'I am different.」というものが含まれている。

次に、「海外体験で私が変わった点は」という文章を完成させる問いに対する回答の分析結果をみる。(表6参照)

表6 海外体験で変わった点

	(実数)	
国際的視野	47.5%	48
コミュニケーション・スタイル	30.7%	31
自我の確立	21.8%	22
自信がいった	15.8%	16
自立した	12.9%	13
積極的になった	10.9%	11
フェミニストになった	9.9%	10
生活を楽しむようになった	6.9%	7
職業を持つ上での利点	5.0%	5
その他	33.7%	34
変わったと思わない	4.0%	4
計	199.1%	
(コメント記入者101名中の%)		

最も多かった回答は、「多様な価値観を受け入れる。」「文化差に敬意をはらうこと。」「異なった文化があり、生き方の多様性を理解したこと。」「I see things from broader perspective.」などの意見に代表されるように、国際的視野を身につけたというものであった。次に多かったのは、「自己主張ができるようになった。」「イエス、ノーをはっきり言うようになった。」「I've become much more outspoken and straightforward.」のようにコミュニケーションのスタイルが変化したという意見であった。自我の確立については「自分自身であることを恐れない。」「個人としての自覚を与えてくれた。」「自分をより積極的に見つめられるようになった。」「人の言うことを気にしなくなった。」などの意見が出されていた。「何でも自分でする。頼らない。」の意見に代表される自立したという意見も13名が述べていた。また、「It made me active.」「I thought I was shy but I found myself outgoing.」等の意見に見られるように積極性、行動力などを得たという者も11名おり、「I can't stand sex discrimination any more.」「I used to think a woman's happiness was to marry someone at certain age and have children but my overseas experience changed that idea.」「I'm a feminist now.」のように女性に対する差別、女性の

権利や役割について考えるようになったとの意見も10名から出されていた。その他複数回答があったものとしては、「I learned how to enjoy life.」等のように生活を楽しむことや、「qualified me as a professional.」の意見に代表されるように留学の結果、職業人として活躍する資格を得たと回答しているものがあった。

その他と分類された意見では、「flexibility in thinking」「日本が必ずしも天国でないこと。」「忍耐強くなった。多くの仕事をてきぱきとこなせる。論理的な思考ができる。」「宗教的価値観」「個人の自由についての理解を深めた。」など、様々な変化が挙げられていた。

5. 考察

結果から、ほとんどの帰国者が何らかの形で帰国に際して逆カルチャーショックを経験しており、その内容も多岐にわたっていることが判明した。また、回答者の多くにとって帰国後10年以上の歳月が経過していることを考慮すればそのショックの大きさが窺えるものとなっていた。それらの原因は、日本的コミュニケーション・スタイルの規範やそのあり方、グループ志向、人間関係、非言語コミュニケーション等外国人や帰国生が日本で直面する問題点と酷似していることも明らかになったといえよう。感受性の豊かで傷つきやすい子供達が母国で感じる疎外感や違和感ほど強烈ではないにせよ、帰国した女性達も違った意味で様々な心理的ストレスにさらされており、葛藤している様子が窺えた。また、女性の地位、女性への規制、差別など、女性ならではの問題点も数多く指摘されたことから、帰国女性達は日本文化とアメリカ文化の差異ばかりでなく、日本の中に厳然と存在する男性文化と女性文化の差異や理想とする男女平等主義と現実とのギャップに対する葛藤も経

験していることが窺える内容となっていた。

今回帰国に際して逆カルチャーショックを感じなかったと回答した者が2割強あり、また、渡米年齢、滞米期間や、帰国してからの年月の長短に関してはサンプル数の少なさもあり、一貫した関連性が見られなかった。今後、逆カルチャーショックの諸要因等を明らかにするために、渡米の時期や滞在年数などを限定した詳細な調査をする必要があるだろう。

回答者達が日本や日本人に対して様々な形で違和感を抱いた経験を持っていることが今回の調査から判明した。時に彼女たちの日本社会や日本人に対する目は大変厳しく、その批判は辛辣でもあった。彼女らの目に映る日本は決して女性にとって楽園ではないようである。

しかし、さらに詳細な分析を通して見えてきたことは、彼女たちの多くが同時に日本社会や日本人の長所も理解していることである。回答者達は一方的に日本を批判しているわけではなかった。それは、日本人について最も好きなことという項目に対しては回答者のほとんどが、熱のこもった書き込みをしており、日本を母国として大切に思っている様子が窺えたことから理解できよう。また、語られたその内容について見てみると、察し、丁寧さ、慎み深さ、感受性など来日した外国人の語る長所に酷似したものとなっていた。このことは多くの帰国女性達は一時的に母国を離れ、米国に暮らし、学ぶ中で、以前とは異なった見方で母国文化である日本を見るようになったことを意味するのではないだろうか。実際、回答者の多くが自らの視野の変化を認めており、彼女達は一度外の世界に身を置くことで、母国文化に対する理解や洞察力もより深めることができたと言えよう。

滞米経験を通して得られた変化については、回答の文面から判断すれば、自身ではその経験を肯定的にとらえていることが窺われた。

回答者が挙げた変化から、「個」を大切に、必要に応じて自己主張をしていくことの大切さというアメリカ文化の価値観を学び、身につけ、自信を持って帰国した強い女性像が浮かびあがった。その変化はアメリカ文化への傾倒ともとれるが、それは同時にまた自己主張、自立、積極性など益々国際化する日本社会において必要であり、かつ多くの日本人にとっては不十分であると言われている資質でもある。また、多くの回答者達が挙げていた複眼的思考は、異文化コミュニケーションにとって必要なものであり、まさに多くの回答者は国際化時代に活躍できる異文化コミュニケーションとしての資質を養って帰国したともいえるのではないだろうか。

このように新しいコミュニケーション・スタイルと自信を身につけ帰国した回答者達ではあるが、「周囲からは嫌われます。」とある回答者も述べているように、この新しさは現実社会の中にあっては周囲との軋轢の原因ともなっていることも窺われ、帰国生同様に帰国成人と周囲の人々との人間関係についてもさらなる調査が必要であることが判明した。

また、多くの回答者達が新しく身につけた価値観、行動様式、そして自己概念と渡米前に身につけていた日本文化との狭間で何らかの葛藤を感じた経験を持っていることが判明した。周囲が自分に期待する「日本人らしい、そして女性らしい」立ち居振る舞いや態度と自らが理想と考える態度とのギャップに気づき愕然とし、同時に苛立ちを感じるという経験は多くの女性達が共有していた。日米のようにその文化を体現する価値観や人々の態度、コミュニケーションの理想像の差異が大きな場合、その2つの異なる文化を自身の中に取り入れ、両文化の均衡を保つのは決して容易いことではないだろう。ある回答者は、「典型的な日本人にはそのように表面上でつきあい、理解してもらえない人には自分を通すやり方で互いにフランクにつきあうという風な使

い分けをしている。」と述べていたが、このようになんらかの方略を取り入れている帰国者の姿は珍しいものではないだろう。同質性、同調性を強く求めるといわれる日本文化にあっては、異質な文化を学習した者は必然的に何らかの葛藤や、周囲からの強い軋轢を感じるようになる。それらを克服するために個人々が試みている方略についてもさらなる調査の必要を強く感じた。

アンケートの回答から、当調査の回答者達はまぎれもなくアメリカ文化の影響を強く受け帰国し、かなりの者が帰国後もそれを維持していることが窺える結果となっていた。しかし、ここで言うアメリカ文化がステレオタイプ的で表層的な文化の域を超え、文化の深層部にまで達する深い理解、学習を伴ったものであったか否かについては疑念が残ることを問題点の1つとして指摘しておきたい。これは帰国女性達にインタビューを行っていたアメリカ人共同研究者の「帰国女性の中には非常にものをはっきりと言いすぎて、失礼な感じを与えるものが多い」という指摘と筆者自身の帰国女性達に対する観察、そして今回の調査結果から得られた疑問である。すなわち、文化の深層にあたる価値観、思考法などは目に見えないものだけに学習もそう簡単には出来ず、外の文化で育ったものにはなおさら、その文化の神髄を理解することは、決して容易いことではない。多くの場合、顕在化したものや、自己の経験した数少ない事例、そして既に形成されているステレオタイプ等を基に新しい文化を理解することになる。その結果、理解したはずの文化が実は自己の思いこみの上に成り立っている架空の文化であるということも生じるだろう。つまり、はっきり言わなくては伝わらないという経験を通して、「何でもはっきり言えばよい」という誤解とも言える一面的な学習をしてしまい、相手に失礼にならないように最低限度気を配るなどという、ある意味では普遍的な気遣い

までも捨て去ってしまい、本人はそれに全く気付かないという悲劇が起こっていたのかも知れない。今回、回答者並びにインタビューを受けた者の多くが経験したのは大学を中心とした極めて狭い社会であったことと、「英語」という外国語が介在した「文化学習」であったこともその「誤解」を進めた遠因として挙げられよう。

6. おわりに

近年女性の留学が増加していると言われていいる。依然目的意識が希薄なままで遊学する女性も存在するだろうが、新聞等のメディアがこぞって取り上げているように、自分の能力を高め、次の就職に備えてというようにはっきりとした目的を持って留学に踏み切る女性達が増えているという。当然、今後当研究の対象者となったように高等教育をアメリカで受けた後、帰国する女性達も益々増加することが予想される。当調査の結果からは、滞在期間、渡米時期などに拘わらず、多くの帰国者達が自らの価値観、コミュニケーション・スタイルなどに変化を認めており、帰国後日本社会の中で様々な葛藤を経験していることが判明した。今後、当調査を出発点ととらえ、留学または滞在期間、渡米・帰国時期など各種要因を統制した綿密なる調査をし、要因間の関係性を明らかにする必要と同時に滞米による影響が時間の経過と共にどのように変化していくかといった事柄についても調べていくことが必要であろう。また、今回は女性に限定し調査を行ったが、今後は男性も含め男女間での差異にも注目し、研究を進めることも必要であろう。

日本とアメリカ、この両極端とも言えるほど異なっている文化に接した者にとって、その2つのバランスをとることは決して容易なことではないだろう。個々の人間がそれをどのようにして成し得ているのか、そしてその

葛藤の中で何を感じているのか等についても今後さらに詳細なる調査を続ける必要があるだろう。

注) 当調査は当初筆者と米国人研究者 Diana Putman 氏の共同研究として始まったものである。当アンケートは Putman 氏が行った帰国女性に対するインタビュー結果と筆者の文献調査、及び小規模のインタビュー結果を基礎にして両者の話し合いの上、作成されたものである。アンケートは Putman 氏との共同研究であったため、便宜上全て英語で作成した。その後、アンケート分析に対しては各自で個別に行うことにしたため、当小論は筆者の責任により執筆したものである。また、本文中で紹介した回答者の意見は全て原文に忠実に記述するべきであると考えたため、日本語で回答が記入されたものは日本語で、英語で記入されたものについては英語で記述した。

【参考文献】

Gama, E. M. P. Pedersen, P. (1977) Readjustment Problems of Brazilian Returnees from Graduate Studies in the United States. *International Journal of Intercultural Relations*. 1, No. 4, 46-58.

Kidder, L. H. (1992) Requirements for Being 'Japanese': Stories of Returnees *International Journal of Intercultural Relations*. 16, 383-393.

Uehara, A. (1986). *Comparison of Reentry Adjustment between Japanese and American Students: an Interactionist Perspective* (Doctoral Dissertation, University of Minnesota.) University Microfilms International, 5712.

稲村博 (1980) 「日本人の海外不適応」NHKブックス,

上原麻子 (1988) 「帰国適応期」相互作用 - 円滑

なコミュニケーション要素考察試論

「異文化コミュニケーション研究」創刊号
神田外語大学異文化コミュニケーション研究所, 123-145.

小野田えり子 (1988) 異文化体験者としての帰国子女「異文化間教育」第2号アカデミア出版会, 86-98.

久米昭元 (1990) 青年海外協力隊員にみる国際的資質 「平成元年度科研 (総合研究A) 研究成果報告書日本の児童・生徒の国際的資質・能力育成に関する基礎的研究」149-159

倉地暁美 (1991) 女性の海外生活体験とその影響: 予備調査 「立命館国際研究」4巻2号, 93-107

佐藤郡衛 海外・帰国子女教育研究と異文化間教育「異文化間教育」第10号, 27-43

田村, 今村 (1987) 海外子女, 帰国子女の不適応に関する臨床的研究 - 個人事例を中心に「異文化間教育」第1号, アカデミア出版会, 55-66.

原裕視 (1987) 海外勤務者のリエントリーに伴う問題と対応策 「異文化との関わり」川島書店

巖ナオミ (1987) 海外成長日本人の適応における内部葛藤 - ライフヒストリーによる研究から 「異文化間教育」第1号, アカデミア出版会, 67-80.

養浦康子 (1984) 「子供の異文化体験」思索社

[Abstract]

An Exploratory Study of Reverse Culture Shock: Japanese Women Returnees from the U. S.

Noriko HASEGAWA

The purpose of this study is to examine the adjustment of Japanese women to familial and professional life after their return from academic training in the United States. 113 returnees out of 519 answered the questionnaire designed to examine the changes in their values and communication styles and the specific problems they faced. Content analysis of their answers revealed that: 1) most of them experienced reverse culture shock upon their return from the U. S., 2) reverse culture shock they experienced is in many ways similar to what the returnee students suffer, but is different in that they face the discrepancy of women's roles expected of them between the two countries, 3) most of them admit the changes of their values, communication styles, and concept of self after their stay in the U. S. Overall, they seem to regard their overseas experience and the changes that occurred to them positively, but are facing the challenge to accommodate the two different values and modes of conduct; the old Japanese ways which were once familiar and the new ones they learned in the U. S.